

(試し読み版)

筋肉蔑視の世界で
二メートル級ガチムチイケメン
醜男伯爵に執着で抱き潰されました

からあげのみこ

第一章

馬に乗るのは嫌いではなかったが、得意とも言えない。

本来なら丘の上から軍の展開を視察するだけの予定だった。

だというのに——馬が突然暴れ、セレスはあれよあれよという間に前線の混乱へと放り出されたのだ。

前方で剣戟が煌き、怒号が飛ぶ。敵味方の区別もつかぬ戦場の中で、やたらと身なりの良いだけの騎士として浮いていた。

槍の穂先が閃き、軍馬の蹄がこちらを目掛けて迫る。

ああ、これが人生の最期かと、覚悟を決めたその刹那だった。思い出してしまった。

かつての平凡なOLとして暮らしていた記憶。そして何よりも、筋肉を愛し、筋肉に恋し、筋肉で人生を照らしていた女だったと

いうこと。

だからこそ、命を救ったその人。

その背中の躍動が、輝きすぎていて、眩しすぎて、息を呑んだ。僧帽筋、広背筋、そして背骨を包む凄まじいライン。

隆々と盛り上がるそれが、馬を駆るたびに力強くうねる様は——まるで希望だった。

セレスに向けられた敵兵の剣が、振り下ろされるより先に折れた。

なぜなら、斧が空間ごと切り裂いたからだ。

眼前で閃いたのは、風さえ震える一撃だった。

その戦斧を振るった者の、背中と腕。盛り上がる筋肉の全てを、セレスは見た。

ただ、それだけだった。あまりにも完璧な一瞬に、彼女は落馬

した。

地面に叩きつけられながら、今度こそ最期を覚悟した。

軍馬の蹄が迫る。槍が閃く。だけど、どれも来なかった。

視界が開けると、そこには統制された騎馬たちに囲まれ、静寂が戻った戦場があった。

馬上から、彼が降りてくる。

戦斧を背に負った軽鎧の姿。身体に斜めにかけて深紅の布には精密な刺繍が施されている。逞しいその腕を、セレスに差し出す。

(二メートル級のガチムチ……！)

——その姿が、光に包まれて見えた。前世で見た「推し」よりも尊かった。

掴まれた手の温もりが強すぎて、セレスの口から言葉が滑り出た。

「ありがとうございます！　結婚してください!!」

その瞬間、彼の眉がぴくりと動いた。

整った眉間に皺が寄り、困惑と戸惑いと微妙な哀愁が混ざった声で、彼は言った。

「……頭を打ちましたか？」

低い音が背骨に響く。

その余韻にひたる間もなく、背後の女騎士が即答する。

「救護所にお運びしろ。マクシモン公爵家の息女だ!」

救護所にて、セレスは頭を包帯でぐるぐる巻かれていた。

たしかに頭は打った——が、たんこぶ程度で済んでいる。命に別状はない。

問題があるとすれば、その口と目と心が、完全に筋肉に犯されていたという点だ。

暴れ馬とともに行方不明になったセレスの無事を、家臣たちは心から喜んだ。

しかし、それもつかの間だった。

助けてくれた騎士の話になると、セレスは語り出す。広背筋の張り、僧帽筋のうねり、上腕三頭筋の神々しさ——それらを熱く、長く、滾るように。

あまりにも詳細な「筋肉講評」に、家臣たちは口を閉ざすしかなかった。

ついには、ひとりが口火を切った。

「セレス様、本当に……正気なのですか!？」

確かに、騎士に助けられ恋をする貴族令嬢など、物語ではよくある話だ。

だが——ここは、少々特殊な世界である。

男女比は一对五。男は希少な存在であり、政治・経済・軍事の中心は女。

そして、美の基準もまた歪んでいる。

細く儂げな美少年こそが理想。

筋骨隆々の男は「野蛮」「醜悪」とされ、敬遠されて久しい。

そんな世界で、筋肉を称賛するなど——異端の極みである。

ましてやセレスは、マクシモン公爵家の第四令嬢。

つい先日まで、サロンで儂げな美少年を侍らせていたはずなのに。

「お嬢様を助けた恩人の身元が判明しました！」

天幕を勢いよくめくって、公爵家の騎士が駆け込んでくる。

「ライバツハ家——急死した姉に代わり、家督を継いだシグルド伯爵です」

その名を聞いた瞬間、セレスはピンと来た。
夜会や茶会には一切姿を見せず、「社交界の謎」と呼ばれる存在。

希少な男騎士でありながら、その外見ゆえに「醜男」と蔑まれ、疎まれてきたという人物。

その存在をめぐって、社交界では——「出席したらワイン奢り」「返事のある手紙が来たら一〇〇〇ルド支払い」などと、悪趣味な賭けの対象にすらされていた。

だが、セレスは違った。

目が輝いた。瞳孔が開いた。魂が震えた。

「……よし、シグルド殿と、なんとしても結婚しましょう」

突如として爆発する爆弾発言。

騎士たちは、口を開いたまま固まった。

「なぜ、そうなるのですか……？」

常識的な疑問が口をついて出るが、セレスはただ、静かに、確信に満ちて微笑む。

——この世界で、シグルドの魅力を理解できるのは自分だけ。

誰も気づかない価値を、自分だけが知っている。

誰も愛せないものを、自分だけが溺愛する。

その優越感と興奮が、セレスをぞくぞくさせた。

「こんな素晴らしい出会い、逃す手がありますか？」

彼女はもう決めていた。

——異世界転生して最初に見つけた奇跡を、絶対にこの手で掴み取る。

婚約は一応成立した。

というのも、ライバッハ領の大半は寒冷な山地で、特産物に林檒があるだけ。産業もない。

当然、財政は常に綱渡りで、ライバッハ家の家臣たちも、シグルド自身も、公爵家からの援助と異例の嫁入り持参金を無下にはできなかった。

結果として、シグルドの意志とは無関係に、婚約は進められた。そしてライバッハ邸での同居もセレスの強い希望で予定を繰り上げて始まった。

「……セレス嬢のお父上はこの婚約に反対と聞いておりますが、そう問いかけたシグルドに、セレスは笑みを返す。

「父上は姉たちの結婚にも最初は反対していたんですよ。でも、いまでは義兄たちと実の親子のように仲良くしています」

「義兄上たちは、どのようにお父上と？」

「簡単なことです。姉たちに子どもができたなら、父上は手のひらを返しました」

セレスはさらりと答え、柔らかく微笑んだ。

「……なるほど」

つまり、セレスが同居を早めたのは父を孫という既成事実で黙らせるため。

そのことを悟ったシグルドの表情は硬かった。

「ところで、セレス嬢。あなたの護衛の騎士たちとうちの騎士団の者たちが、馬でどこかへ行こうとしていますか———なにか、ご存知ですか？」

窓の外を眺めると、騎士たちが馬を駆り、城門の先へと走り去っていくのが見えた。

午後の日差しに照らされて、城下町はどこか穏やかな表情を見せている。

「街道沿いに出る山賊を狩るとか聞いてましたけど……あれ、シグルド殿に無断だったんですね？」

セレスの反応は、やけに軽かった。

シグルドは、心の底から深いため息をついた。

「……ええ、事後承認になるでしょう」

「うちの騎士たちがせっかちで、たぶん急かしたんです。ご迷惑をおかけしました」

セレスは軽く頭を下げたが、その表情にはあまり反省の色がなかった。

「今回の件は、公爵家の荷馬車が襲撃されたことへの報復です。恩賞も経費も、マクシモンの実家からすべて出させていただきます」

すので、ご安心ください」

山賊の存在には、ライバツハ家も以前から頭を悩ませていた。だが、限られた財政では大規模な騎士団の出動など到底叶わず、ずるずると放置せざるを得なかった。

「ずいぶんと、用意がいいんですね」

皮肉にも似た言葉が、シグルドの口からこぼれる。

「ええ、最初から山賊狩りをする決めておりましたので」

セレスは前世でプレイしていた都市開発SLGを思い出していた。

治安ゲージが真っ赤なままでは、いくら資金をつぎ込んでもすべて裏目に出る。

なにより統治者としての評価が地に落ちてしまう。

だからこそ、まずは山賊退治だ。治安を立て直さなければ、領

地はあつという間に崩壊してしまふ。

「ちなみに次は、街道の補修を予定しております」

そして次に着手すべきは街道の補修。

道がなければ人も物も動かない。

交通アイコンが赤く点滅すれば、商業区は衰退し、物流も止まってしまう。

だから——次は道を整える。

「街道の補修、ですか」

シグルドは目を伏せ、しばし沈黙したのち、言葉が続けた。

「それは……さすがに、貸付という形にしてください。援助を受けるだけでは、伯爵家の矜持が保てません」

「もちろんです」

即答するセレスの声には、どこか嬉しそうな響きがあった。

「これはわたしの支援ではなく、あくまで将来の投資ですから。あなたと、この領地の未来への」

街道の整備は、すべての始まりに過ぎない。セレスは、そう確信していた。

「……セレス嬢は、私を買いかぶりすぎです」

苦い笑みを浮かべて、シグルドが呟く。

「ご謙遜を」

セレスはやわらかく返し、そっと彼の手を取った。

そして、その大きな掌を自分の頬にあてる。

猫のように目を細め、頬をすり寄せるようにして、じっとそのぬくもりを味わった。

「……この手で、何度も誰かを守ってきたのでしょうかね」

囁く声には、滲むような愛おしさが宿っていた。

シグルドは、ただそのまま、なんとも言えない表情で受け入れるしかなかった。

* * *

ナイトドレスの上から軽くローブを羽織り、セレスは静かに部屋を出た。

この時間、人目を気にする必要などない。

けれど、扉の前に立ったとき、ほんのわずかに深呼吸をした。ノックに返ってきたのは、いつもと変わらぬ、低く穏やかな声だった。

「どうぞ」

その一言に、セレスはためらいなく扉を開ける。

暖炉の灯が揺れている。

ソファに腰を下ろし、一冊の本を手にしていたシグルドが、そこにいた。

「失礼します。……遅くにすみません。眠れなくて」
微笑みながら近づき、セレスはためらいなく彼の隣に腰を下ろす。

その瞬間、シグルドの肩がほんのわずかに強張った。

「ホットミルクでも、持ってこさせましょうか？」

本から目を離さずに、シグルドが言う。声は静かだが、どこか張っていた。

「シグルド殿と私は、同い年ですよ」

セレスはくすりと笑う。子ども扱いされるとは。

あからさまな距離の取り方に、むしろ愉しげな声色で。

セレスの指先が、そっと膝の上に置かれる。
ローブのすき間から覗く白い肌が、暖炉の火に照らされてゆらりと揺れた。

シグルドは、本から目を離さない。だが、声がわずかに低くなっていた。

「おやめください」

ページをめくる動きが、一瞬だけ止まる。

「私は貴女が思うような、穏やかな男ではありません」

セレスは微笑んだまま、何も言わない。

ただ、視線だけで「知ってますけど？」と言っていた。

シグルドの瞳がようやく彼女に向く。

その目には、うっすらとした警告の色があった。

「腕力は、男の方が強いのですよ」

低く、慎重に、けれど確かに言葉が落とされる。

「あなたの周りにいた男童たちと違って……飢えた男の危うさを、軽く見ない方がいい」

その言葉に、セレスは一瞬だけまばたきをして。

そして、にこりと——まるで無邪気な少女のように笑った。

「でも、わたしとシグルド殿は婚約者ですよ？」

まるで当たり前のことのように、柔らかく。

だからこそ、ひどく破壊的だった。

理性の糸が、あまりにも簡単に——音もなく、切れた。

シグルドは本を閉じた。

その音が、やけに静かに響いた。

次の瞬間、セレスの身体が宙に浮いていた。

何が起きたか理解するより早く、彼の両腕に抱き上げられ、ひ

よいと肩に担がれる。

力任せではない。ただ、迷いも容赦もない。

まるでセレスの意思など関係ないと言わんばかりに。

数歩、床を踏みしめる音が続いたのち、セレスはふわりとベッドに放られた。

その動きはどこまでも丁寧で、けれど容赦がなかった。

ぎし、とベッドが静かに軋む。

シグルドがセレスの上に身を乗せ、その視線が真っ直ぐに降ってきた。

「――逃げ出すなら、これが最後ですよ」

低く、けれど決して脅しではない声。

ただ、本気の熱と、ほんのわずかなためらいが滲んでいた。
セレスは、迷いなく微笑んだ。

「まさか。初めてお会いしたあの日から——わたしはずっと、このときを待ちわびていました」

そのまま、シグルドの首へと腕を回す。

柔らかな動きで、けれど意志は揺るがない。

まるで、シグルドの身体そのものに誓いを立ててるかのように。シグルドが、ふっと目を伏せた。

その精悍な顔立ちに、微かな翳りが落ちる。

それは不思議な色香を帯びていて、セレスの胸の鼓動をさらに早めた。

次の瞬間、顔が、唇が、そっと近づいてくる。

そしてぎこちなく、触れるだけの口づけが落とされた。

優しく、遠慮がちで、けれど確かな意志を感じる一瞬。

唇を離したあと、シグルドはどこかばつの悪そうな表情で、視

線をそらした。

唇が離れると同時に、セレスは小さくくすくすと笑った。火の揺れる部屋で、その笑い声はやけに甘く響く。

「……可愛い」

セレスの声にシグルドの眉がぴくりと動いた。

一瞬だけ、まるで呼吸が止まったかのように見えた。

そして——彼の手がセレスの顎をそつと掴む。

ゆっくりと、けれど確かな力で顔を引き寄せられ、セレスの唇が、強く、深く塞がれた。荒々しさを含んだ熱。

「——んんっ♡」

先ほどの遠慮がちなキスとは、まるで別物だった。躊躇など、もうどこにもなかった。

まるでそれが、彼なりの返答だともいうように。

ローブの袖が、腕から滑り落ちる。

布の音すら気配に溶け、肌には夜の冷たさが触れる。

続いて、セレスのナイトドレスが肩から、頭上へと引き抜かれた。

柔らかな衣が抜け落ちるたび、熱と羞恥が肌を染め上げていく。最後に残ったのは、薄布の下着だけ。

体温も、鼓動も、隠すものが何ひとつなくなっていく。

そして——シグルドが、自らの上衣に手をかける。

衣が外され露わになったのは、まるで鎧のような身体だった。無駄のない、逞しく、確かな肉体。

鍛え抜かれた筋肉が、淡い灯火の下で陰影を刻む。

隆起した僧帽筋、大胸筋の起始が作る段差、外腹斜筋が斜めに刻む谷。

そこに宿るのは、力だけではない——静かな気配。意志。矜持。セレスは、喉の奥から熱を含んだ息をひとつ、そっと呑んだ。その吐息は、まるで祈りのように、震えていた。

首筋に、そっと落ちた唇。

吐息が肌をかすめたと思えば、次の瞬間には、柔らかく湿った感触が這っていく。

鎖骨から胸元へ、谷間をなぞるように、ゆっくりと——まるで確かめるような動きで。

「あっ♡……ふっ、あ♡」

乳房の先端をふいに口に含まれ、セレスは甘く息を漏らした。ちゅ、ちゅっ……湿った音が静まり返った寝室にくつきりと響く。

吸われ、舌で転がされ、また吸われて。そのたびに、体を跳ね

させ、どうしようもなく声が零れ落ちる。

「やあっ♡……そんなに、吸わないで……♡」

言葉とは裏腹に、シグルドの口づけを拒むことなどできなかつた。

むしろ、もっと深く、もっと長く、彼に触れてほしい。

身体の奥が、そう叫んでいる。

シグルドの手が太腿をゆっくりと滑り、下着越しに、ぷっくりと盛り上がった秘所をなぞり上げる。

「にゃあ~~~~っ♡」

敏感な場所を直撃され、セレスの身体が大きく跳ね上がった。

指先の動きに呼応するように、熱くとろけた蜜が奥からどろっ♡と零れ出す。

濡れた布越しにも、淫らな水音がはつきりと伝わるほどに。

優しさと欲望が混じり合った、逃げ場のないキス。

外腿を撫でるように、シグルドの指が下着の縁へと滑っていく。蜜に濡れそぼった布は、肌にぴたりと貼りつき、素直には落ちない。

くるくると纏れ、脚に引っかかりながら、もどかしく絡まった。思わず、セレスは腰をそっと浮かせる。

指示されたわけではない。けれど、自然と従うように。

そのささやかな協力が背德的で、ぞわりとした快感が背筋を撫でて駆け上がった。

やがて下着が完全に脱がされると、シグルドの身体が、ゆつくりと脚の間へと入り込んでくる。

開かされた両脚の奥から、むわりと甘酸っぱい熱が立ちのぼる。

「……濡れてるな」

濡れ光る秘所を見下ろしながら、シグルドが低く呟く。

その視線の熱に、セレスの心拍がどくんと大きく跳ねた。

そっと、指が触れる。

剥き出しになった粘膜を撫でながら、そのぬめる感触を確かめるように、ゆっくりと動かしていく。

そして、指先がひそやかな襞の奥へと、慎重に滑り込んだ。

「ここか……？」

囁くような声とともに、指の腹がざらついた粘膜をぐりりと撫でる。

ぞくん♡と、甘く痺れるような快感が背骨を駆け上がった。

「あおっ♡♡んんっ……くうんっ♡」

反射的に跳ねた身体。太腿が震え、息が詰まる。

けれど、シグルドはその様子すら落ち着き払って見つめていた。

「素直な身体だ」

羞恥で胸が詰まる。

こんなに見られている。弄ばれている。

それなのに——嫌じゃない。

むしろ、その視線にぞくぞくと身体が悦びを覚えていくのが、どうしようもなく恥ずかしかった。

再び指先が触れる。陰核の裏側、もつとも感じる一点をぐりぐり♡と、浅く、確実に攻め立てる。

「ふああっ♡♡ひゃっ、あんっ♡♡やあっ♡♡」

仰け反る身体。震える太腿。

シーツを掴んだ手が、快感の波に溺れていく。

シグルドは、そのすべての反応を楽しむように、指先へさらに力を込める。

「ほら、もつと……もつと、気持ちよくなつて」

その声とともに、熱い衝撃が下腹を貫いた。

「にゃああああっ♡♡♡ああっ……で、でるうっ♡♡♡」

ぴしゅっ♡

秘所の奥から、温かい液体がほとぼしる。

セレス自身が驚くほどの勢いで、恥ずかしい音を立てて。

足先まで痙攣しながら、セレスは快感の奔流に吞まれていった。

「今度は潮？　こんなに、感じるんだな」

愛おしげに髪を撫でられながら、セレスは蕩けきった表情のまま、彼の腕の中へ崩れ落ちる。

ま、彼の腕の中へ崩れ落ちる。

荒い息を整えながら、ぐったりと身体を横たえた。

心も身体も、すべてがこの人のものにされてしまった。そんな

甘くてどうしようもない諦めが、胸の奥をじわりと満たしていた。

シグルドが下衣に手をかける。

その動きに、セレスは思わず息を呑む。

露わになったそれは、想像を遙かに超えていた。

聳え立ち、暴力的なまでの質量と存在感を宿して、ただそこに在る。

シグルドは、視線に気づいていた。

視線の熱と震えを、そのまま受け止めて、静かに口を開いた。

「……セレス。挿れて、いい？」

たったそれだけの問いかけに、セレスの顔が一気に赤く染まる。喉が震え、言葉にならないまま、ただ無言で頷いた。

その一つの動きに、全身の欲が応えた。

身体の奥まで、熱が震えをともなって満ちていく。

腰を抱かれ、ゆっくりと探るように、シグルドのモノが押し入

ってくる。その動きは、驚くほど丁寧だった。

だがそれは、あまりにも大きすぎた。

「っ♡……あ、う……♡♡」

浅い喘ぎが、喉の奥から洩れる。

ゆっくりなのに、いや、ゆっくりだからこそ、苦しさが際立った。

内臓を、押し潰されるような圧迫。

下腹がぎゅうと締め付けられ、子宮の奥がじんじんと痺れていく。

熱い。重い。深い。

入ってくるそれが、自分の形を、奥から塗り替えていくようだった。

「……セレス？」

掠れるような声でシグルドが問う。

セレスは、痛みに歪んだ顔のまま、小さく首を振った。

「……だいじょうぶ、もっと……おく、まで……♡」

掠れた声でそう答えたセレスに、シグルドの手がふつと強くなつた。

硬く、熱い体を、少しずつ奥へと沈めていく。

ゆっくりと、確実に。

「……はっ♡あ、ん……っ♡」

喉から零れる声は、苦しげなのにどこか甘い。

奥へ入ってくるほどに、体の中が圧迫されていく。

まるで、子宮の形すらも、それに合わせて変えられていくよう
で。

息が止まるほど、苦しいのに、熱い。

限界だと思った瞬間、腰が深く沈んだ。

ずん、と奥底に届いた衝撃。

腹の奥がぎゅっと締め上げられた感覚と共に、セレスは全身を震わせた。

「……ぜんぶっ♡はい、った♡♡♡」

声は、震えて、甘くて、どこか恍惚としていた。

シグルドは、そこでやっど深く息を吐いた。

額をそっとセレスの額に重ね、何も言わず、ただ頬を寄せた。

深くまで届いたそのまま、しばし時が止まったようだった。

セレスの身体が小さく痙攣している。膣内がぴくぴく♡とシグルドの陰茎を締め付け、甘く、濡れた熱で彼を包み込んでいた。

シグルドの指先が震える。

肩に置かれた手に、ほんのわずかに力がこもる。

「セレス。すまない。……動くぞ」

かすれた声のその言葉が終わるより早く、シグルドの腰が、ゆつくりと、だが確実に引かれた。一気に、奥へと突き上げる。

「おっ♡おほっ、おっ♡♡♡」

自分でも出したとは思えない声に、セレスはびくりと身体を跳ねさせた。

ずんと沈むたびに、腹の奥をつかれる。

子宮の底を撫で上げるような、衝撃と熱。

ぱちゅんぱちゅんと肉がぶつかり合う音が静かな部屋に響く。

シグルドの顔は、苦しげだった。欲と理性の綱引きで、目元が歪んでいる。

「お、おっ♡……気持ち、いい……♡」

呟いたセレスの声が、甘く震えていた。

シグルドの熱が、深く突き上げてくるたびに、体の奥がじんじんと痺れていく。

苦しくて、でも、快感の波がその痛みすら甘く変えていく。

「ひゃっ♡あっ♡……んっ♡」

口から零れる声を、自分でも抑えきれない。

体が勝手に跳ねる。シグルドの腕の中で、溺れていく。

それなのに、ふと気づいた。

見下ろすシグルドの顔が、さっきまでと違っていた。

熱に滲んで、眉が寄って、どこか——苦しそうで、堪えているように。

「……そんな顔、されたら……無理だ」

その呟きと同時に、動きが変わった。

力強く、迷いも遠慮もない、理性の枷が外れたような動き。

ずっと奥へ突かれて、喉の奥から悲鳴のような声が洩れる。

「っアああ♡し、ぐるど♡♡」

ぐちゃぐちゃにされていくのに、怖くなかった。

むしろ、嬉しかった。

シグルドが理性を捨てるほど自分を求めてくれたことが、嬉しくて。

「セレス……もう……っ」

吐き捨てるような声さえ、愛おしく思えた。

腕に抱きしめられる。壊れ物みたいに。でも、その腕の震えも、必死な熱も、全部、自分に向けられている。

「わたし、シグルドに♡……こんなに、されて……っ、しあわせ♡♡」

言葉が熱に溶けて、息と一緒に漏れていく。

思考も感覚も、とつくとろとろに溶けて、ただ彼の中に揺れていた。

意識が白くなっていく。

奥まで突き上げられるたびに、セレスの身体が跳ねる。

「っ、んあ、ズッ♡あ、そこ♡だめ、また……っ♡」

膣内が勝手に締めつけてしまう。

中が、もうぐちゃぐちゃで、自分でもわからないくらい熱い。

シグルドの腰が、浅く、速く打ちつけられる。

「セレス……もう、限界……」

それを聞いた瞬間、セレスの中にも何かが決壊した。

頭の奥が真っ白になって、言葉じゃない声が喉から迸る。

「あっ、あっ、イク……♡イクイク♡♡シグルドと♡いっしょに

いっ♡♡♡」

最後の一突きで、下腹の奥まで深く、深く満たされた。
ビクツと震える感覚。

どくどくと熱が注がれて、セレスの中がそれを受け止めていく。
果てたあとの身体は、ふたりともひどく熱かった。

呼吸が合わさり、汗ばんだ額を寄せ合って、どちらも何も言え
なかつた。

〈シグルド視点〉

シーツに汗が染みていた。

肌に貼りつく感触さえも、今はどこか心地よい。

セレスは、穏やかな寝息を立てていた。

熱の余韻を宿したまま、愛された証をその身に受け止めたまま、腕の中で眠っている。

そしてその隣でシグルドは、頭を抱えていた。

正確には、額に手をあてて、魂が抜けかけていた。

誰にも見せられない表情で、黙って思考を回していた。

「……終わった」

誰に言うでもなく、小さく呟く。

その声には、どこか清々しさすらあった。

絶望と幸福の狭間に浮かぶ、どうしようもない現実の味。

「よりによって、公爵家の令嬢を……俺が……しかも……あんなに……」

ひとりの反省会は終わらない。

でも、何度頭を抱えても、抱いた事実は消えない。

腕の中で、セレスが寝返りを打った。

無防備な寝顔が、シグルドの方に向く。

口元には、うっすらと満ち足りた笑み。まるで「いい夢、見えます」とも言いたげに。

「………可愛いな、ちくしょう」

頭を抱えていた手が、そっとその頬に触れた。

それだけで、もう逃げられないと悟る。